

福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第11号 2009年8月31日 発行

目次

*「福澤諭吉と神奈川」展……………	1	*主な新収資料……………	5
*「未来をひらく福澤諭吉展」福岡での試み……………	3	*主な動き……………	7
*講演会……………	4	*センター諸記録（2009年3月～7月）……………	8



特別展「福澤諭吉と神奈川—すべては横浜にはじまる—」
の開催：神奈川県立歴史博物館

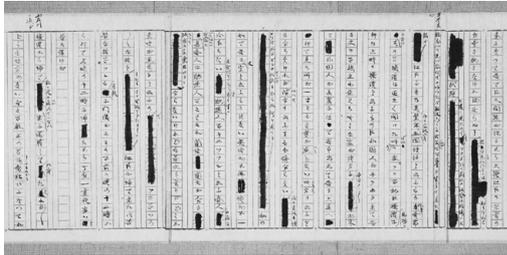


展示品より 五雲亭貞秀「神名川横浜新開港図」（提供：神奈川県立歴史博物館）

慶應義塾創立150年記念事業として平成21（2009）年1月から東京、福岡と巡回した展覧会「未来をひらく福澤諭吉展」が、現在大阪市立美術館で開催されています（8月4日～9月6日）。この展覧会と時期を一部同じくして、本年開港150周年を迎える横浜の地で「福澤諭吉と神奈川—すべては横浜にはじまる—」が開催されます。これは、さきの巡回展とは企画が異なり、福澤諭吉および慶應義塾と神奈川県との関わりに焦点をあてた展覧会です。会場となる神奈川県立歴史博物館は、福澤とつながりの深い旧横浜正金銀行本店（重要文化財）の建物です。



会場となる神奈川県立歴史博物館の建物
（提供：神奈川県立歴史博物館）



【写真1】福沢諭吉『福翁自伝』原稿（英学発心）明治30-31年。横浜を訪れ、オランダ語が通じないことを知る。

○ 展覧会の概要

『福翁自伝』には、大阪の適塾で蘭学を修得した福沢が、安政6（1859）年、開港間もない横浜を訪れた際オランダ語が通じなかったことから、それまでの蘭学を捨て英学に転じたこと、翌年、咸臨丸にて渡米する際に浦賀に上陸したエピソードなどが記されています（[写真1][写真2]）。また、福沢は家族や学生を伴い、しばしば鎌倉や箱根へ静養に出かけ、その土地の人々との交流を楽しみました（[写真3]）。一方、実業の面においては、横浜正金銀行の設立に関わるなど貿易や実業界の発展に寄与し、彼の門下生の中からは神奈川・横浜の政財界、教育界で活躍する人物が輩出されました。さらに慶應義塾の歩みにおいても、昭和9（1934）年の日吉キャンパス開校、平成2（1990）年湘南藤沢キャンパス開校など義塾と神奈川県との関わりは少なくありません。

本展覧会では、このような福沢諭吉と神奈川、横浜の多様な関わりについて、書翰、原稿、写真、著作物をはじめ、遺品類などの関連資料により紹介します。

○ 展示構成

第1部—福沢諭吉 Who's who

福沢の日用品や、同時代の番付などにより福沢諭吉という人物のイメージを多面的に描き出します。

第2部—福沢諭吉の見た横浜

福沢が訪れた安政6年の開港間もない横浜と、その後の文明開化の窓口として発展する横浜の様子を浮世絵、版画、写真などにより紹介します。

第3部—福沢諭吉の海外体験

万延元（1860）年、文久2（1862）年、慶応3（1867）年の3度の福沢の海外体験と、それに基づく帰国後の活動を日記、模型、書簡、写真などを通じて振り返ります。



【写真2】福沢諭吉と写真屋の少女の写真。万延元年咸臨丸で渡米した際、サンフランシスコで撮影したもの。

第4部—神奈川の福沢山脈

箱根開発、相模自由民権運動、丸善・横浜正金銀行・Y校などの創立をはじめ、神奈川県内で福沢が関与したできごとを、ゆかりの福沢門下生とともに取り上げます。

第5部—慶應義塾と神奈川

県内にある日吉（昭和9年開校）、矢上（昭和47年）、湘南藤沢（平成2年）の3つの慶應義塾のキャンパスに残された、地域の歴史を語る多くの考古遺跡や、近代の郊外開発、また戦争の歴史について紹介します。



【写真3】鎌倉を詠んだ福沢諭吉の漢詩（5頁参照）。

○ 主な展示資料

- 1) 福沢諭吉の洋服、ワイングラス
ほか日用品、福沢旧蔵洋書
- 2) 『福翁自伝』原稿、英学転向を決意させたクニフラー肖像写真
- 3) 咸臨丸・ポーハタン号乗組員の土産物・遺品、アメリカで購入してきた教科書
- 4) 横浜正金銀行開業免状、箱根福住楼主人の日記、横浜商業学校規則
- 5) キャンパスからの出土品、日吉台地下壕遺物

【特別展「福沢諭吉と神奈川—すべては横浜にはじまる」】

○ 会場

神奈川県立歴史博物館特別展示室・コレクション展示室（交通）

- ・東横・みなとみらい線「馬車道」駅5番出口から徒歩1分
- ・市営地下鉄「関内」駅9番出口から徒歩5分
- ・JR「桜木町」駅・「関内」駅から徒歩8分

○ 会期

平成21（2009）年8月22日（土）～9月23日（水・祝）
休館日は毎週月曜日（9月21日を除く）
9：30～17：00
（毎週金曜日は20：00まで、入館は閉館30分前まで）

○ 主催

慶應義塾、フジサンケイグループ、神奈川県立歴史博物館

○ 観覧料

一般 800円（700円） 20歳未満・学生 500円（400円）
65歳以上・高校生 100円
中学生以下・障害者手帳をお持ちの方は無料
（ ）内は20名以上の団体割引料金

*詳細につきましては以下のHPをご覧ください。

- ・ <http://ch.kanagawa-museum.jp/>（神奈川県立歴史博物館）
- ・ <http://www.keio.ac.jp>（慶應義塾）

「未来をひらく福沢諭吉展」福岡での試み

いわ なが えつ こ
岩 永 悦 子
(福岡市美術館 学芸員)

大規模な展覧会が日本各地を巡回する場合、その内容は各会場均質であることが前提である。しかし、この「未来をひらく 福沢諭吉展」では、その前提を超え、各会場の個性が際立つ展覧会をつくることができた。東京展とは様相を異にした、九州の地にふさわしい展覧会へと生まれ変わった福岡展の様子をご報告したい。

慶應義塾のスタッフと福岡のスタッフが、福岡展で心がけたことは、以下の3点である。

- (1) 九州色を出すこと
- (2) 福沢諭吉・慶應義塾になじみのない人に理解しやすくすること
- (3) 小中学生など若年層に発信すること

(1) 九州と福沢の紐帯

東京会場での展覧会の内容は、最新の福沢研究の成果を問うものであった。しかし縁の地・九州では、それにも増して福沢と九州との紐帯を強調することが、必要であった。郷里大分の人々が抱く福沢像を満足させ、他県人には九州出身の福沢がいかにも、偉大な人物であったかということ伝えるため、＜日本を変えた『学問のすゝめ』は、もとは九州のために書かれた＞という事実を強調することを、福岡展の軸とした。

このような意図のもと、福沢研究センターの都倉武之専任講師が、20点以上の追加展示品を選び、10点を越える写真や資料のパネル類を準備してくださった。『学問のすゝめ』については、さまざまな版や版木を追加していただき、さらに、片仮名版の初編冒頭部をスタンプに起こし、来館者に自由に捺して持ち帰って貰うサービスを行った。この他に注目を集めたのは、西郷隆盛と福沢諭吉の関係を追加展示品とパネルで構成したコーナーで、主催新聞社以外の紙面でも紹介された。

(2) 展覧会の道案内

資料を「読む」ことで、はじめてその面白みが味わえる歴史系の展示品を、展覧会という「見る」ための装置で伝えるには、視覚に訴える仕掛けが必要である。そのために福岡展では、一部本来の展示順(図録の掲載順)を逸脱して、会場構成をおこなった。例えば、会場の冒頭に、福沢の生涯を見渡すかの如くに肖像写真を集めたり、「福沢と家族」のコーナーでも、息子二人を抱く福沢の写真を冒頭に掲げて、そのコーナーのコンセプト

を、視覚的に理解してもらうことを試みた。

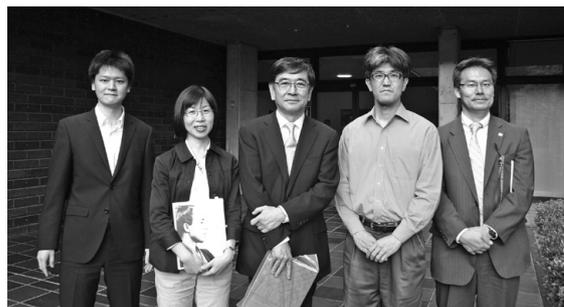
また、文書や書籍など、見た目に区別がつきにくい展示品が多いことから、図録よりも細やかにコーナー分けすることを都倉講師や、キュレーターの平塚泰三氏にお願いし、目の前の展示品がどのような文脈にあるのかを、明快に表示して道しるべとした。分かりやすい展示の実現は、展示デザイン・施工スタッフの力に負うところ大であった。

(3) 小中学生に向けて

小中学生など、若年層に展覧会を開くことに積極的な西日本新聞社からの提案で、小中学生向けのブックレット(無料)を製作した。都倉氏には歴史展示部分、平塚氏には美術品展示部分のコンテンツを製作していただき、福岡で編集した。福岡展の中心テーマにそって「学問のすゝめノート」というタイトルにし、付録に双六をつけたが、内容は福沢諭吉が『学問のすゝめ』を執筆するまでの半生をたどるものとした。

展覧会のガイドブックにもなり、独立した読み物としても成立する「学問のすゝめノート」は、ユーモラスな語り口や、デザイナーのマツダヒロチカ氏の生き生きしたイラストと相まって、大人にも好評であった。福岡市内のいくつかの中学校は、体験学習で美術館に来館するなどして同展を見学したが、その事前学習用としても活用された。

これらの試みも、展覧会の成果として決して十分なものではなく、反省の余地は多い。展覧会としては、困難な面が多かったにもかかわらず、現場の「勢い」や「気持ち」は、衰えることがなかった。それは、福沢諭吉という人の生き方を紹介する展覧会であったからあり得たことだったと確信している。



写真は左より都倉講師、筆者、音声ガイドのナレーションをお願いした石坂浩二氏、山口当館学芸員、岩田課長(慶應義塾150年事業室)

福沢諭吉の「怨望」論をめぐって

かる べ ただし
苺 部 直



《講師略歴》

東京大学法学部・大学院法学政治学研究科教授。

専門は日本政治思想史。2006年、『丸山眞男—リベラリストの肖像』でサントリー学芸賞（思想・歴史部門）を受賞。

福沢諭吉が、『学問のすゝめ』第13編「怨望の人間に害あるを論ず」（1874年12月）で、人間心理における「怨望」を主題としていることは、松沢弘陽氏や小泉仰氏といった研究者によって、これまでも注目されている。福沢はどのようにして、この「怨望」を思想の主題とすようになったのか。その「怨望」論の変遷に、福沢の思想のどのような変化が反映しているか。そうした「怨望」論から、いま、どのような意味を読みとるべきか。そうした諸点について説明したい。

「怨望」の語は、J・S・ミルが『自由論』『代議制統治論』でとりあげた、envyの訳語として、福沢が『学問のすゝめ』第13編で初めて用いたものである。だが、これを“嫉妬”としてとらえると、初期の福沢の著作には、嫉妬の感情を、秩序を活性化させ、たがいの間の力の均斉を保たせるものとして、むしろ高く評価する箇所が目につく。たとえば、『西洋事情』外編巻之一では、西洋各国の内では、人々が「相競て」秩序を支えていること、そして各国の間でも、「相羨み相嫉むの情」が勢力の均衡を生んでいることを指摘している。

しかし、廃藩置県と秩禄処分による武士身分の解体、そして不平士族を主体とした議会開設運動の勃興が、envyに対する福沢の見かたを、政治的なものに変えてゆく。民撰議院設立建白に対する福沢の見解は、「明六社会談論筆記」に見られるように、加藤弘之の時期尚早論を批判するものであった。そして『学問のすゝめ』第13編において、政治参加から閉め出された不満が、「怨望」として社会に蓄積することの危険を説き、それを解消し社会の安定を導くための、政治参加と言論の自由化

を唱えたのである。

漢語「怨望」が、本来は、主君に対する臣下の不満を言い表すさいに用いられていたことも、この訳語を選んだ背景となっただろう。『文明論之概略』第5章・第9章に見えるように、徳川時代における、身分制支配に対する人々の「怨望」が積もり積もった結果として、王制一新・廃藩置県という政治の大変革がもたらされたと、福沢は考えていた。

だが、1877（明治10）年以降、西南戦争と、府県会を舞台とする自由民権派の運動のもりあがり、明治の新政権のもとで、こうした「怨望」が再燃し、社会を再び混乱に導くという危機感を、福沢に強く意識させた。郡県制のもとでの「怨望」が秦帝国を滅亡へ導いたとする、賈誼「過秦」（『新書』所収）の議論が、あるいはその背景にあったかもしれない。

こののち、福沢の議論は、『分権論』（1877年）における地方民会論や、『民情一新』（1879年）における、中央政府での議院内閣制論に見えるような、「怨望」を吸収し「人心収攬」を可能にする政治制度の提唱へと、重点を移してゆく。『学問のすゝめ』第13編で、同時に福沢が強調していた、日常生活における「堪忍の心」、すなわち異論への寛容という論点は、後景にしりぞくことになった。しかし、たとえば大江健三郎氏が『新しい人』の方へ』（2003年）で福沢の「怨望」論を引いて述べるように、社会における不満がすんなりとは政治過程には乗りにくい、21世紀の現在、福沢がいったん後景におしやめた、「怨望」の日常における自覚と克服という主題が、もう一度、大きな重要性をもつようになっているのではないだろうか。



会場となった三田演説館

（本稿は2009年6月25日に行われた春学期福沢研究センター講演会の概要である。）

平成21(2009)年3月から7月までの間に福沢研究センターに収蔵された資料のうち、主なものを紹介します。今回も引き続き多くの方々から、特に卒業アルバムを中心として卒業生の遺品をご寄贈いただきました。厚く御礼申し上げます。またバックルやバッジなどの金属製品もいただきましたが、これまで福沢研究センターの所蔵資料は紙、布、木製品が9割以上を占めておりましたので、今後は限られたスペースのなかで、それ以外の素材のものをいかに保存するかも課題のひとつと考えます。紙幅の都合上、ご寄贈・ご寄託いただいたすべての資料をご紹介することができず、申し訳ございません。

福沢諭吉遺墨

■ 「大幸似無幸」扁額 1点

【個人所蔵者より寄託】

福沢は、「大幸無幸」という言葉を関防印（書の右肩に捺し、はじまりの位置を示す印）に使用しており、好んで使用した言葉だと思われそうですが、扁額や書幅としてはほとんど残っておりません。



他に関防印として使用した言葉のひとつに「自在不自由之中」という言葉があり、これら2つの言葉は、いずれも相反する言葉を並べ、一方的な見方ではなく対立する概念から真実を見極めようとする福沢の態度を示しているといえます。

■ 漢詩「戊子之夏于遊鎌倉」書幅 (P.2 [写真3]) 1幅

【安部康二郎氏寄託】

「曾是將軍開業城 群雄狂夢幾回驚 遊人不問千年事 唯愛水声山色清」

つちのえねの夏、鎌倉に遊ぶ／ かつて是れ將軍の開業の城 群雄の狂夢いくたびか驚く 遊人は問わず
千年の事を ただ愛す、水声山色の清きを

福沢は、子どもたちや慶應義塾の塾生を伴い、避暑や海水浴を目的に鎌倉を訪れました。『福沢諭吉全集』（再版、昭和44-46年、岩波書店）の年譜や書簡などで確認できるのは、明治3（1870）年、10年、20年、21年の4回ですが、書簡での様子や周囲の回想などから考えると、もう少し頻りに訪れたように想像されます。

訪れた際には、長谷観音ちかくの三橋旅館に宿泊しました。三橋家は長谷村の有力農民で、文化年間（1804-1818）にはすでに旅館として営業していたといわれます。明治以降名望家として成長し、当主は三橋与八と言いました。旅館の敷地は3000坪といわれ、専用の海水浴場も所持していたようです。明治21年に前年の東海道線藤沢停車場の開業を受けて客室を増築しましたが、客足は益々増え、8月16日付『毎日新聞』には増築した客室も満員とあります。福沢以外にも、伊藤博文や2代目市川左団次など、多くの有名人が宿泊しました。

漢詩の内容は、ここ（鎌倉）は昔將軍源頼朝が幕府を開いた城のあったところで、多くの英雄が狂おしい夢を結び、また幾度か驚き目覚めたことであろうが、いまこの地に遊びに訪れた私たちは、千年のむかしの英雄たちの夢の事などは知らぬ顔で、ただ山水の景色のすがすがしさを愛するだけである、と詠ったものです（富田正文『福沢諭吉の漢詩35講』、平成6年、福沢諭吉協会）。若い頃から、気分転換には竜王の浜や高瀬川、大貞など中津の自然に遊んでいた福沢は、鎌倉を訪れた折には東京の喧騒を離れ、静かにゆっくりと美しく清しい景色を堪能したいと考えていたのだと思います。

しかし現実はその甘くはなく、東海道線が整備されていくと東京鎌倉間にかかる時間は短縮され、戊子は明治21（1888）年にあたりますが、前年20年9月14日付の書簡では3時間の道程とあり、21年7月18日付の書簡では藤沢まで汽車で、そこから人力車に乗り継ぎ2時間半ほどだと書かれています。いずれにしろ十分に日帰りさえできる距離となり、福沢は必要に応じて、東京との間を往復し、仕事をこなさねばならなくなっていました。この年も7月19日から8月13日まで鎌倉に滞在しましたが、途中一度帰宅して子どもたちを連れて23日に再び鎌倉へ、また30日に単身東京へ戻り、仕事をこなして8月3日に再び鎌倉に向うという生活でした。

（この書幅は、本年8月22日（土）から神奈川県立歴史博物館で開催される「福沢諭吉と神奈川」展に出品されています。本紙2頁参照。）

❖ 主な新収資料

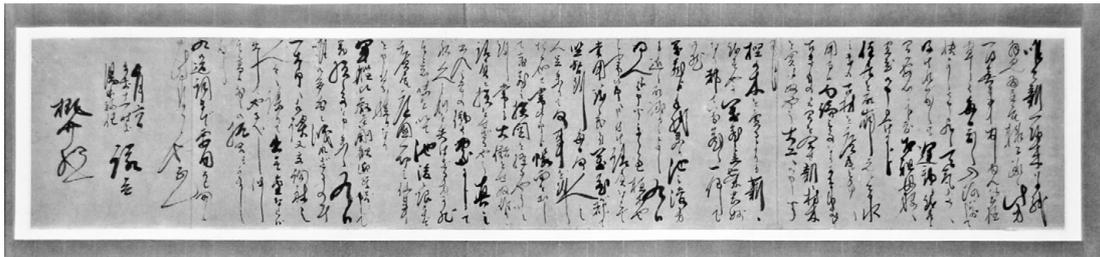
福沢諭吉書簡

■ 福沢桃介宛書簡 明治24年5月6日付 1通

【服部禮次郎氏寄託】

福沢桃介は福沢諭吉の次女ふさ（房）の夫です。明治元（1868）年に岩崎紀一の次男として生まれ、川越中学を経て、15年慶應義塾に入り、19年には福沢の養子となりました。20年からアメリカに留学し、帰国後の22年に房と結婚しています。この書簡は、『福沢諭吉書簡集』（全9巻、平成13-15年、岩波書店）にも未収録で、これまで公開されたことのなかった新資料です。文中で軍艦比叡金剛歓迎会について触れられていることから、発信年は明治24年であると判明しました。差出地として書かれている「湯本福住」は、塔之沢の福住とともに、箱根における福沢の定宿です。当主の福住九蔵は、二宮尊徳に学び明治期の報徳運動の推進者のひとりとなりました。福沢は明治3年に発疹チフスに罹って、その病後の静養のため箱根で湯治をして以来、しばしば湯本や塔之沢を訪れるようになりました。

書簡の内容は、留守宅の様子を知らせた桃介の手紙に対する返信です。この年福沢の三女俊は卵巣嚢腫が見つかり、3月に帝国大学医科大学病院に入院して手術をしました。その療養のために、箱根を訪れたものと思われ、冒頭の部分では俊が元気で入浴などを行っている様子を伝えています。ついで、福沢家の普請に関することが書かれています。福沢家はこの年、信頼を寄せていた大工の金杉大五郎に依頼して、5月下旬から9月までかけて大規模な改築工事を行いました。この書簡では、福沢家のいわゆる使用人であった万蔵（高仲熊蔵）の意見を聞いたり植木屋の常次郎に依頼しながら、古財や庭木の整理から手を着けた様子が伺えます。さらに本文末では、前年に遭難したトルコ船の乗客の救援活動にあたった軍艦の歓迎会に対する拠出金について述べています。



慶應義塾関係資料

■ ヴィッカーズ・堀江帰一講義受講ノート 各1冊

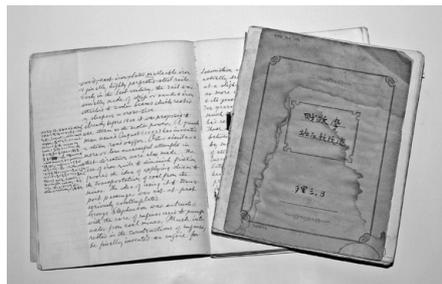
【武野健太氏寄贈】

筆者は寄贈者の曾祖父にあたる坂口重登で、明治16（1883）年に前橋に生まれ、前橋中学を経て、42年に慶應義塾大学理財科を卒業後、慶應義塾監局、北海道炭礦汽船株式会社、日本毛織株式会社（日本モスリン）、日本放送協会に勤務しました。これらは理財科在学時に、ヴィッカーズおよび堀江帰一の講義を受けた際のノートです。堀江帰一は29年に理財科を卒業し、32年に慶應義塾が初めて海外に派遣する留学生のひとりに選ばれてハーバード大学で学びました。英国経由で35年に帰国したのちは義塾で教鞭をとり、高橋誠一郎の談によれば義塾の経済学部でその影響を受けなかったものはひとりもないようです。41年から大正9（1920）年まで学部の主任を務めました。エノック・ヴィッカーズは、1869年の生まれ。学部理財科の初代主任教師であったドロップアスの後任として31年に赴任し、経済学を教えました。当時の理財科は外国人教師が英語で教え、学生たちも英語でノートを取り、テストも英語で答えていました。

■ 本多次郎普通部成績表 5冊【本多孚氏寄託】

成績表のような資料は、規程は残っても実物はなかなか残りにくく、また公開もされにくいものです。本多次郎は大正4年慶應義塾普通部に入学し、非常に優秀な成績を修めました。14年に経済学部を卒業されています。

*物故者の敬称は略させていただきました。



ヴィッカーズ・堀江帰一講義受講ノート



普通部成績表

■ 小泉信三記念基金による研究助成

小泉信三記念慶應義塾学事振興基金に小泉家からの寄付が新たに組み込まれ、寄付者の意向により、規程の一部が改正され、「小泉信三とその時代に関する研究」の助成が今年度より実施されるようになった。助成に関する細則が定められ、福沢研究センター所長を委員長とする研究助成委員会が発足した。委員には看護医療学部教授山内慶太君、経済学部教授池田幸弘君、福沢研究センター専任講師都倉武之君が就任した。

今年度は当センター准教授西沢直子君を研究代表者とする共同研究『『小泉信三とその時代』研究のための基礎的資料の収集・整理』に対して助成されることになった。小泉家から寄贈された資料の整理、および岩波茂雄宛小泉信三書簡の編集・刊行を予定している。

■ 「未来をひらく福沢諭吉展」の巡回

上野の東京国立博物館で1月10日～3月8日まで開催された福沢展は次の会場となった福岡市美術館にて、5月2日～6月14日まで開催された。初日のオープン記念講演会ではセンター所員で前所長の経済学部教授小室正紀君が「股引すがたの福沢諭吉—現実主義者の反骨—」と題する講演を行った。また、6月7日にはセンター所員である法学部准教授小川原正道君が「日本文明化の中の九州と慶應」と題して講演を行った。会期中の入場者数は約21,000名。

このあと福沢展は8月4日～9月6日まで大阪市立美術館（天王寺公園内）で開催、関連企画展として6月20日～9月23日まで国立国際美術館（中之島）にて「慶應義塾をめぐる芸術家たち」が開催される。

また、本年は神奈川開港・開国150周年にあたるが、義塾創立150年との合同イベントとして、神奈川県立歴史博物館にて8月22日～9月23日まで「福沢諭吉と神奈川」展が開催される（詳細は1～2頁参照）。

■ 『福沢諭吉事典』の編集状況

『慶應義塾150年史資料集』の別巻2にあたる『福沢諭吉事典』については、『慶應義塾史事典』（別巻1）刊行後に急ピッチで編集作業を進めている。現在は原則的に月に一度編集委員会を開き、事典の項目、付録の内容を検討するとともに、人物項目や書誌解題などの原稿の執筆が進められている。委員会では9月中旬に合宿を予定しており、集まった原稿を検討する予定である。なお、切望していた編集作業スペースについては、管財部の協

力を得て、南館4階に部屋を借りることができた。4月以降、事務机や参考図書、PC、複写機などを設置、編集のための環境が整備されつつある。

■ 大阪での福沢研究センター講座

昨年度に続き、大阪リバーサイドキャンパスにおいて慶應義塾福沢研究センター講座を開催することになった。「近代日本と福沢諭吉」と題して、7月18日から来年1月30日にかけて月に1回、合計7回の講座を開講する。講師は全員が福沢研究センターの設置講座を担当している義塾専任教員である。

なお、第2回（8月8日開催）では、講座終了後、大阪市立美術館で開催中の福沢展に会場を移し、見学会を行った。

■ 講演会、セミナーの開催

4頁にあるように、6月25日に東京大学法学部教授の荻部直氏により「福沢諭吉の「怨望」論をめぐって」と題する講演会が三田演説館で開催され、盛況であった。

センターでは神奈川県立歴史博物館で開催の「福沢諭吉と神奈川」展に合わせ、8月29日（土）14:00から同博物館の地下講堂にてシンポジウムを開催する。テーマは「家族とは何か—福沢諭吉の女性論・家族論を通して現代を考える—」、パネラーとして、マリオン・ソシエ氏（フランス国立東洋言語文化大学）、ヘレン・ポールハチェット君（本塾経済学部）、宋惠敬氏（韓国高麗大学）をお招きする。司会は当センター准教授西沢直子君。

■ 『近代日本研究』第26巻の編集

第26巻は来年2月の刊行をめざしているが、前号の刊行が創立150年の式典が行われた2008年11月であったことから、刊行間隔が長くなってしまった。そのことも影響しているように、現在、投稿希望が20本を超え、これまでで最大の投稿数となることが予想される。投稿論文掲載方針の確認が編集委員会で承認され、それに基づいた厳格な審査が行われる予定である。

■ 教員免許状更新講習

秋学期に日吉で開講されている福沢研究センター講座「近代日本と福沢諭吉」を教員免許状更新講習（選択領域）として文部科学省に申請したところ、6月16日に認可された。免許状更新講習を受講しなければならない塾内の一貫教育校の教員が主な対象となる。

福沢研究センター諸記録(2009年3月～7月)

■ 諸会議

- *平成20年度第3回運営委員会(3月10日)
- *平成21年度第1回運営委員会(6月24日)
- *平成21年度第1回センター会議(5月26日)
- *平成21年度第1回執行委員会(5月21日)
- *『近代日本研究』第26巻編集委員会(7月9日～)
- *小泉基金運営委員会(7月22日)
- *『福沢論吉事典』編集委員会
合宿(3月24～25日):クロスウェーブ東中野
第22回(4月20日)、第23回(5月27日)、第24回(6月30日)
- *創立150年記念展覧会実行委員会(4月8日)
- *慶應義塾ゆかりの地・史跡等保存検討委員会
第1回(5月14日)
- *ワークショップ
・「書幅や卷子などの扱いについて」
文学部非常勤講師平塚泰三君他(4月13日)
- ・「<近世近代史研究交流会との合同開催>
「日本外交における国際法体制への適応」
報告者:高原泉氏(中央大学通信教育部インストラクター)
:後藤新氏(武蔵野大学非常勤講師)(4月25日)
- ・「福沢論吉と陪審員制度」
報告者:吉田成利君(福沢研究センター調査員)(5月8日)

■ 人事

<事務局>

- 退職 手取屋幸代(派遣職員) ～3月31日
- 新任 山根 秋乃(非常勤嘱託) 4月1日～
- 印東 史子(派遣職員) 4月1日～

■ 資料貸出

- *横浜美術館 福沢関係資料1点(3月27日～6月11日)

■ 来往

- *塾員玉川博己氏来訪、資料閲覧(3月5日)
- *佐藤正志氏来訪、資料を寄贈(3月10日)
- *早大大学史資料センター望月雅士氏来訪(3月23日)
- *塾員見澤綾子氏来訪、資料を寄贈(3月25日)
- *齊藤静氏来訪、資料を寄贈(3月27日)
- *郵研三田会松本純一氏、大高正志氏来訪、展示替協力(4月1日)および資料閲覧(4月8日)
- *東洋大学井上円了記念学術センター所長他1名来訪(4月3日)
- *中央大大学史資料編纂課中川寿之氏、横内氏来訪(4月11日)
- *高知市立自由民権記念館の公文豪氏来訪、資料閲覧(4月17日)
- *講談社小川卓氏、日本カメラ博物館白山真理氏来訪、資料閲覧(4月20日)
- *塾員藤井三郎氏来訪、資料を寄贈(4月30日)
- *塾員波多野勝夫氏来訪、資料を寄贈(5月1日)
- *龍谷大学経済学部小峯敦教授来訪、資料閲覧(5月11日)
- *準硬式野球部OB鈴木秀五郎氏来訪、資料閲覧(5月19日)
- *米国在住のウィル塚本氏来日、祖父について懇談(5月23日)
- *筑波大学仙石和道氏来訪、資料閲覧(6月4日)
- *塾員平瀬佳邦氏来訪、資料を寄贈(6月18日)
- *塾員高橋志郎氏来訪、片桐邦郎名誉教授旧蔵資料を寄贈(6月19日)
- *法政大学笹川孝一ゼミ来訪、西沢准教授よりセンターの説明と案内(6月19日)
- *塾員渡邊昌氏来訪、資料閲覧(6月26日)
- *準硬式野球部OB鈴木秀五郎氏ほか2名来訪(7月3日)
- *国立公文書館館長高山正也氏来訪、所長と懇談(7月22日)

■ 出張・見学(以下、西沢は西沢准教授、都倉は都倉講師の略)

- *「未来をひらく福沢論吉展」(東京国立博物館)関連
・西沢、都倉ほか、撤収作業(3月9日～11日)
- *同展 福岡会場(福岡市美術館)関連
・都倉、福岡市美術館で打合せ(3月27日)
- ・都倉、福岡展資料借用のため、中等部、幼稚舎(4月8日)
- ・都倉、福岡市美術館で打合せ(4月16日)、能古博物館から福岡展

- の資料借用(4月18日)
- ・都倉、福岡展資料借用のため国会図書館(4月24日)
- ・西沢、都倉、大庭調査員、福岡市美術館で展示準備(4月26日～5月2日)
- ・西沢、山口県文書館で資料借用(4月30日)
- ・西沢、都倉、福岡展内覧会に出席(5月1日)
- ・西沢、福岡市美術館で打合せ(5月19日)
- ・都倉、資料調査・展示替えのため福岡(5月23～25日)
- ・西沢、山口県文書館へ資料返却(6月2日)
- ・都倉、福岡市美術館で会場詰め(6月13～14日)
- ・西沢、都倉、福岡市美術館で撤収作業(6月15～17日)
- ・都倉、展覧会資料返却のため能古博物館(6月27日)
- *同展 大阪会場(大阪市立美術館)関連
・都倉、150年事業室ほかと市立美術館で打合せ(3月12日)
- ・都倉、文学部の平塚講師、小野講師と市立美術館で打合せ(6月10日)
- ・西沢、都倉、徳永調査員、横山調査員、大阪市立美術館で展示準備(7月28日～8月3日)
- *「福沢論吉と神奈川」展(神奈川県立歴史博物館)関連
・西沢、都倉、歴史博物館で打合せ(3月17日)
- ・米山所長、西沢、都倉、歴史博物館で打合せ(4月24日)
- ・西沢、都倉、歴史博物館で打合せ(6月3日)
- ・都倉、北九州市立自然史・歴史博物館で資料下見(6月12日)
- ・西沢、都倉、歴史博物館で図録作業(6月24日)
- ・西沢、都倉、三田で歴史博物館学芸員と作業(7月6日、24日)
- ・西沢、歴史博物館で図録校正作業ほか(7月8日、14日、17日)
- ・米山所長、理事とともに歴史博物館を訪問(7月29日)
- *都倉、資料架け替えのため中津の福沢記念館(3月26日)
- *西沢、資料架け替えおよび評議員会出席のため中津の福沢記念館(3月26～27日)
- *都倉、写真複製の立会いでThe Printsを訪問(5月7日)
- *酒井事務長、発掘調査聞き取りのため、港区郷土資料館(5月12日)
- *米山所長、西沢、旧邸保存会の理事会・評議員会出席のため中津(5月18日)
- *都倉、日吉で地下壕の内部調査に参加(5月21日)
- *赤堀係主任、全国大学史資料協議会東日本部会2009年度総会に出席のため東京経済大学(5月28日)
- *西沢、都倉、イリス創立150年パーティーに出席(6月3日)
- *西沢、明治維新史学会出席のため函館(6月13～15日)
- *西沢、福岡市美術館から中津の福沢記念館へ資料運搬(6月18日)
- *都倉、日吉寄宿舎の現地調査(6月29日)
- *都倉、『三田評論』の座談会収録のため大阪(7月1日)
- *米山所長、東京国際ブックフェアでの授賞式に出席(7月9日)

■ 講師派遣

- *都倉、福岡の「麻生塾」で福沢展関連の講演(3月4日)
- *小室所員(経・教授)、大阪でのセンター講座で講義(3月14日)
- *都倉、福岡三田会例会で講演(4月17日)
- *西沢、システムデザイン研究科の合宿(府中)で講演(4月26日)
- *都倉、西日本新聞社支店長会例会で講演(5月12日)
- *都倉、大阪慶應倶楽部で講演(5月29日)
- *西沢、福岡市美術館にて福沢展見学ツアーの展示解説(6月2日)
- *小川原所員(法・准教授)、福岡展にて講演(6月7日)
- *西沢、福沢論吉記念文明塾で講義(6月20日)
- *西沢、大妻女子大で「福沢論吉の女性論」を講義(7月2日)
- *都倉、SFC高等部の福沢先生記念講演会で講演(7月9日)
- *西沢、SFC中等部の福沢先生記念講演会で講演(7月14日)
- *西沢、明治大学法学研究科で講義(7月14日)
- *都倉、産経新聞(大阪)で講演(7月16日)

■ その他

- *『慶應義塾史事典』が第43回造本装幀コンクールで日本書籍出版協会理事長賞(事典・全集部門)を受賞(6月2日)

慶應義塾福沢研究センター通信 第11号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2009年8月31日(年2回刊)
編集 慶應義塾福沢研究センター
発行 〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電話 03-5427-1603
http://www.fmc.keio.ac.jp/
印刷 (有)梅沢印刷所